

防災千葉北部

NPO法人日本防災士会 千葉県北部支部会報 平成27年8月1日発行(第21号)
事務局 〒272-0812 市川市若宮2-27-8 090-4389-9380(飯岡方)

東北視察勉強会報告 Part1

青木 信夫

平成27年5月22日から24日にかけて、千葉県北部支部、江戸川支部、東京都支部多摩ブロック、防災コミュニティネットワークのメンバー11名で東北視察に行きました。目的は4年を経過した被災地を視察すること、被災された方にお会いして当時のお話や想いをうかがうことです。何気ない企画でしたが、笑いあり、涙あり、楽しく悲しく心が大きく揺れる勉強会になりました。

■ 1日目 (5月22日)

夕刻ホテルに到着。すぐに会食の場所に移動し、4ヶ月にわたり避難所生活を余儀なくされたAさんとそのお母様に会い夕食を共にしました。被災者のイメージとは異なり、非常に明るく快活で終始笑いを誘ってくれました。避難所では甘いものが多く、しょっぱいものを欲していたところおせんべいが届き歓喜したこと、下着類に困ったこと、いじめにあったことや人の本性が露わになることなど、避難所で起こる様々な出来事、ドラマをお話ししてくださいました。



■ 2日目 (5月23日)

貸し切りバスでホテルを出発し、道の駅「上品の里」でNさんと合流。Nさんは義理の両親と姪を大川小学校の近くで亡くされた方です。バスに乗っていただき、北上川沿いを大川小学校に向かいながら3.11当時のこの地の出来事をお話ししてくださいました。途中明らかに土地の低い集落がありましたが、その集落はなぜか無事であることなど、興味深いお話もありました。



大川小学校に着き、当時石巻市の教育関係のお仕事をされていたHさんにお会いします。Hさんは大川小学校よりさらに下流にあった自宅を失い、現在大川地区の復興関係の活動をされています。ご遺族の方々と行政との間に入り尽力されているHさんのお話は大変勉強になりました。



大川小学校でNさんHさんと別れ、一行は女川町へ向かいました。新しく出来た女川駅はモダンで機能的な造りでしたが、周りはまだ高台造成の真っ最中で、ポツンと駅がたたずんでいるイメージです。駅近くの会議室で女川「いのちの石碑」の山下修君、修君のお母様、当時女川中学校で社会科を担当されていた阿部一彦先生にお会いします。1000年後のいのちを守るにはどうしたらよいか、中学一年生の子も達が自らの体験を徐々に語っていく中で、3つの教訓を柱にしていくこととなります。

1. 互いに絆を深める
2. 高台に避難できる町づくり
3. 記録に残す（いのちの石碑21基）

この3つの教訓は文字にすれば一般的なことかもしれませんが、この教訓は壮絶な体験が基になっています。ある子が言いました。『うちのおじいちゃんは一旦高台に避難したけど、まだ残っている人がいるからと言って助けに行った。戻ってきたけど、「あまり顔を知らない人たちに声をかけても言うことを聞いてくれない。また行ってくる。」と言って降りていった。そして3度目に呼びに行ったとき、おじいちゃんは流されて死んでしまった。もっと絆が強ければ、もっと言うことを聞いてくれていれば助かった人も多かったと思うし、おじいちゃんも死ななかった。絆を深めていかないと助けられるいのちが助けられない。』

子ども達それぞれが大きなものを背負いながらどうしたらいのちが救えるのか、必死になって考えて考え抜いて出された教訓です。

そして「いのちの石碑」を津波到達地点より高い女川の浜21ヶ所すべてに建てるという壮大な計画が立てられました。かかる費用は1000万円。しかし彼らは半年でそれを集めてしまいます。すでに6基が建てられ、高台造成が終わるのを待っている段階です。この話を聞くにつれ、子ども達のまっすぐな想いに触れ、私たちは涙し、感銘を受けました。

この子たちは現在(平成27年5月)高校2年生になり、忙しい毎日を送る中で今度は「いのちの教科書」づくりに取り組んでいます。



深く感銘を受けた余韻が醒めぬうち、近くの仮設住宅に住むIおばあちゃんに会いに行きました。86歳とは思えないしゃきっとした元気で明るいおばあさんです。仮設住宅に住む方たちを集会所にたくさん呼んでいただき、グループに分かれて体験談を聴きました。

ある方は必死になって柵につかまりながらようやく救助された話など、生々しい体験談を聴くことができ、一人ひとりが様々な体験を経ていま仮設住宅で生活をしていることをあらためて考えさせられました。

このIおばあちゃんは踊りが得意とのことで、早速披露していただくことになりました。別の3人のベッピンおばあちゃんを含め、次々とお披露目していただきましたが、踊りが進むにつれ雲行きが怪しい踊りになっていきます。司会と音響は女川町の社会福祉協議会の職員が担当していましたが、これはまだ序の口です、と言っていた意味が分かりました。もう笑いの連続で言葉では表現できないすごい踊りでした。



ホテルに戻り、今日一日の反省会を行いました。疲れたという人は誰もおらず、記憶をたどると、泣き、笑い、感動し、また笑っていました。あるメンバーが言いました。元気付けてあげようなんてとんでもない。我々が元気をもらうばかりだった。この元気を持ち帰りたいと。

■ 3日目（5月24日）

最終日は前日行く予定だった日和山公園に向かい、石巻市を一望しました。

海の反対側は元の街のままでしたが、海側は何もありません。年々茶色から少しずつ緑が増えてきたように感じる景色でした。



その後南三陸町へ移動し、南三陸防災対策庁舎を見学しました。ここには骨組みだけになった建物以外は何もなく、高台造成が進む中でこの庁舎だけが取り残されているイメージでしたが震災遺構として残るようです。

ここでは無人航空機（ドローン）を実際に飛ばしてみ、その動きや高さを体験し、災害時にどのように利用できるのか、安全性はどうかなどを考える良い機会になりました。



■視察を終えて

今回の視察は東北を見てきたのではなく東北を感じることができた勉強会になったと思います。人に触れ、想いに触れ、それぞれの方の体験と教訓、いのちを守るとはどういうことなのか、ぶれない思い、伝えたい気持ち、元気に生きている姿、そこに住みそこで生きていく人たち、いろいろなことを考えさせられました。

3.11当時、「おはようございます」は「生きててよかったね」の言葉とみんなが思っていたような事態に、いま私たちに何ができるか、何をしたらよいのか、答えは見つからないかもしれませんが、そのヒントを得にまた東北の地を訪れたいと思います。

東北視察勉強会報告 Part2

青木 信夫

平成27年5月に行ってきたばかりの東北ですが、3.11当時女川中学校の社会科の先生をしていた阿部一彦先生から、子ども達が考えた津波避難訓練を7月19日行うので参加いただけませんか、とのお誘いがありました。こんなに早くイベントがあるとは思いがけない一報ではあったものの、2ヶ月も経っていないため、多くの参加は見込めないと考えていましたが、前回と同じく千葉県北部支部、江戸川支部、東京都支部多摩ブロック、防災コミュニティネットワークのメンバー計11名が参加することになりました。

前回は心揺さぶられる勉強会でしたが、今回は実利のある、ためになる勉強会になりました。

■ 1日目（7月18日）

夕刻ホテルに到着。ホテルの会議室で阿部一彦先生に再会し、そしてKさん、Aさんの高校生お二人も同席してくれました。お二人は19日の避難訓練に参加できないので、参加する私たちに説明をしてくれるという計らいです。直接子ども達と話ができる機会を設けてくださった阿部先生に感謝しつつ、活動の概要、女川の状況、「いのちの石碑」、「いのちの教科書」、避難訓練について子ども達のプレゼンを聴きました。この子ども達のまなざしは本物です。彼女たちは重いものを背負い、見たくないものを見て、家族を失った友人もいる中で、懸命に訴えていました。その姿は防災という言葉ではなく、いのちを訴える姿でした。一人を救えればいいのではなく、みんなを救うために活動していますとさらっと言えるのは、そこに一点の曇りもないからだと感じました。阿部先生は、「私はこの子ども達にとりつかれています。いや、懂れています。1000年後のいのちを守るために、ひたむきに、一生懸命に取り組んでいる様子を目の当たりで見せられたら、全てを投げ打って何とかしたいと考えないようでは、生きている意味がないのではないかとさえ思っています。」とおっしゃっていました。その意味が少しわかったような気がします。



■ 2日目（7月19日）

5月にお会いしたAさんとそのお母様も参加したいとのことで、朝早くに合流し、車4台、計13名で訓練会場である女川町野々浜に向かいました。9時頃に現着したところ、すでに多くの報道関係者がいて驚きました。

我々は一般観光客役として参加し、避難経路はまったく知らされておらず、どこに逃げるか好きにしてくださいとのことでした。

10時になり、高校生の山下修君の合図で訓練開始です。



我々は一旦シェイクアウトし、揺れが収まったという合図を受けて山を目指して移動します。緩やかな道があったり、がけ崩れ状態の小高い山があったり、階段で登れるところがあったり、参加者約50名が散りぢりに上へ上へと移動します。それを報道陣が追いかけてながら撮影していきますが、皆さん息を切らし、また日差しが強く猛暑の中なのですぐに休んでしまいます。それでもなんとか全員高台に避難しましたが、そこで待っていたのは報道陣の取材の嵐でした。ほぼすべての参加者がインタビューを受けたのではないのでしょうか。しばらくして全員が高台に避難できたところで、次のイベント会場である7基目の石碑披露会場に移動しました。



いのちの石碑7基目が建っているところに参加者が集合し、どこに避難したか、どうしてその場所を選んだのか、避難してどう感じたかなど、この訓練を実施して感じたことを参加者の数名がマイクを持って述べました。結構疲れる、一人なら何とかなるかもしれないが歩けない人を運ぶのは実際には難しい、車椅子を持ち上げて運んだが10mで力尽きてしまった、高台と思ったらそれほど高くないため流されていたかもしれない、高台の頂上まで行ったとき、もうこの先に高いところは無いんだと思ったとたん不安になったなどの意見がありました。

避難訓練が終了し、石碑の披露式に移ります。除幕があり、山下修君が碑文を読み上げます。石碑にはそれぞれ異なる句が彫られています。すべて彼らが中学生の時に詠った句です。この7基目には「暗い夜 たくさんあるさ 希望の星」と彫られていました。



披露式が終わり、一連の行事が終わった後、それぞれが解散していく中で、参加者同士の交流が立ち話で盛り上がっていました。私は避難訓練の時にたまたま一緒に高台に登った女性の方とお話ししましたが、その方は七十七銀行女川支店被災者家族有志の方で、25歳の息子さんを亡くされたそうです。そして休みの日にはご主人が町立病院の下のところ語りをされているとのこと。そんな話から防災士の話になり、そのご主人も防災士の資格を取られたとのこと、これも何かのご縁と電話をされてご主人をこの会場に呼んでいただきました。時間が迫っていましたが、運よくご主人とご挨拶ができ再会を約束しました。防災士が縁を取り持つとは思いがけないことで感慨深いものがありました。

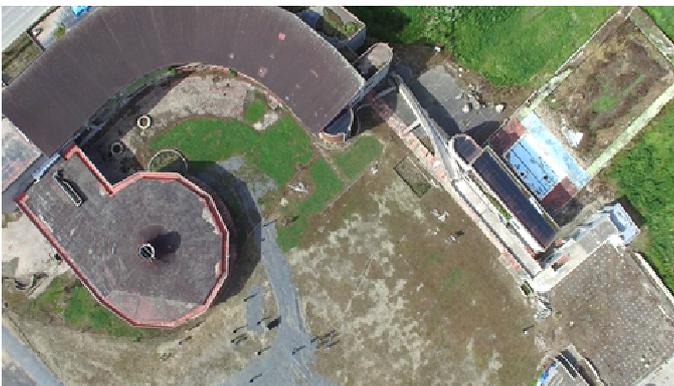
会場を後にし、我々は車で10分ほどの女川原発PRセンターに向かいました。

女川原発は3.11の時に火災が発生しましたが、大きな事故や障害は発生せず、364人の避難者を受け入れ避難所になりました。



その後、笹かまぼこの「高政」に寄り、昼食代わりに自分で焼いて食べる笹かまぼこをいただきましたが、店長の方にどのような団体ですかと聞かれ、防災関係だと言うと、ここでしか見られない映像があるので是非見て行って欲しいという申し出をいただきました。我々も願ってもない話に目を輝かせ、当時の女川の状況を観ることができました。その店長さんは七十七銀行の目の前に自宅があったとのことで、銀行にはよくお世話になっていたことなどを話され、我々からはつい先ほど七十七銀行被災者家族有志の方とお話したばかりといった話をし、何かつながりを感じずにいられませんでした。

おいしい笹かまぼこに後ろ髪をひかれながら、我々は大川小学校に向かいました。何度来てもその悲惨な情景は津波の威力を思い知らされます。ここでは無人航空機（ドローン）を打ち上げ、上空から撮影を行いました。



大川小学校を後にして、5月にお会いしたNさんHさんに会うため、Hさんが経営されているカフェにお邪魔しました。前はあまりNさんとお話ができなかったですが、今回はある程度時間がありいろいろな話を聴くことができました。帰り際、こらえていた涙があふれてしまったとのことでNさんは泣きながらまたお会いしましょうと、帰りを惜しんでくれました。もちろんまた来ます。

長い一日が終わりに近づき、夕食を取るために立ち寄った居酒屋で今日の反省会です。東松島のAさんとお母様もずっと同行いただき、反省会にも参加くださり、ここでもいろいろな話をすることができ、有意義な夕食会になりました。

■ 3日目（7月20日）

3日目はフリーのまま帰路に着くため、視察メンバーは別行動となりましたが、内5名は仙台の荒浜小学校、閑上中学校、日和山に寄りました。共に震災遺構になるとのことですが人のいなくなった学校は余計に暗く感じます。

■視察を終えて

高校生が自らの体験を基に考えた津波避難訓練に参加することが今回の視察勉強会の目的でしたが、本当に勉強になったと同時に、七十七銀行被災者家族有志の方に出会い、笹かまぼこ「高政」では思いがけない映像を観ることができ、我々の帰りを泣いて惜しんでいただいたNさんに再会し、そしてなにより「いのちの石碑」を実現させた高校生たちと直に話しをする機会があり、その想いと確信に満ちた行動、ぶれない心、それを支える先生の姿を肌で感じることは今後の防災を考えていく上で貴重な体験になりました。

反省会では、我々の防災活動はままごとに思えてしまう、意識もレベルも違う、我々にできるのは子ども達の活動を多くの人に知ってもらうことだが、想いを伝えられる技量がない、という反省が出ました。「女川で当時中学生だった子ども達が21基もの石碑を建てました。」「へえすごいね。」で終わってしまいます。彼ら彼女らが受けた衝撃、惨劇、壮絶な体験、そこから殻をこじ開けていのちを救う活動にまい進するに至る経緯、それでもまだ背負うものが大きく消せない事実を胸に本当に100年後のいのちを救うために努力している姿、その想いが込められた石碑、それにとどまらず、現在いのちの教科書に取り組み、おそらく一生をかけてこの活動を続ける決意。我々はこの子ども達に教えてもらったことを少しでも多くの人に伝えられればと、気持ちを新たにしました。

大久保連合町会 防災・減災リーダー研修実施報告

筒井 義臣

大久保連合町会は、習志野市の京成大久保駅を中心とする、傘下の町会・自治会25団体の地域組織です。

平成26年度には第1回防災リーダー研修が計画されたのを機に、発災から24時間の被災をイメージして、命を守り生き延びる術を考え、共有化する研修を提案し、コーディネートを行いました。

この平成26年度の実施内容が好評だったことから、平成27年度も計画したいと支援要請を受けました。このたび地域の防災士として実施計画を提案し、コーディネートを実施したので、以下に報告します。

実施に於いては、BCN代表青木防災士のご好意により地震体験車（起震車）の出動を頂き、また千葉県北部支部中村支部長、中村防災士、飯岡防災士の応援を頂きました。

今回の研修では、首都直下地震による震度6強想定の揺れを体験した上で、我が家の耐震対策をイメージして自己診断し、参加者相互の面識と繋がりを深めつつ、対策の共有化を図ることとしました。



【実施内容】

1. 実施日時： 平成27年6月27日（土）9：30～12：00
2. 実施場所： 市民プラザ大久保
3. 参加者： 47名
4. 揺れの体験
 - ①震動台では、身を守る安全行動（だんご虫体勢）の徹底訓練を実施。
 - ②揺れ体験後、我が家の寝室、居間、台所の耐震対策を自己診断し、アンケートへ回答。
5. 家具転倒防止対策の説明
映像と防止器材展示パネルにより、転倒防止のポイントを説明。
6. 意見交換
揺れ体験後のアンケートを持ち寄り、日ごろの備えを意見交換し、町内での普及の取組みを共有化。

研修後のアンケートでは、皆さん真剣に考え、我が家・町内の耐震対策を実施したいとの感想となりました。

ご協力を賜った防災士各位に厚くお礼申し上げます。

馬込町会 出前講座実施報告

谷 正美

馬込町会は、平成26年度の出前講座における町会役員対象のHUG（避難所運営ゲーム 静岡県）による避難所訓練で緊迫が生まれたことから、本年度の出前講座は、町会役員及び各班長を対象とした避難所運営訓練の体験及び自主防災組織づくりを目的として積極的に実施しました。

馬込町会が大規模災害時に避難所となる法典東小学校の図面を使い、5班の各々に防災士が入り発災当日の動きの想定を付与し、「施設の安全確認」「避難所の開設」「避難者名簿の作成」「災害時要援護者の安否確認」「居住組の編成」「居住スペースの割り当て」「トイレの確保」「避難生活の基本的なルールの作成」などについて、HUGのカードを使用せずに、NPO法人日本防災士会「避難所の開設と運営」の要領を活用して実施しました。

【実施内容】

1. 実施日時： 平成27年6月28（日）10：00～11：30
2. 実施場所： 馬込町自治会館
3. 対 象： 町会役員及び班長 22名
4. 実施内容： 避難所運営訓練（講師：谷 正美）
5. 時間配分： 導入30分 運営訓練30分 質疑応答30分
6. 防 災 士： 中村 誠 中村利孝 飯岡 孝 梅木 満 谷 正美
7. 反 省 点： 短時間での講座で対象者全員に理解してもらう対象毎にパワーポイントを作成すること。

防災士が相互に事前に講演内容をチェック及び当日参加する防災士の役割を確認すべきであった。



危機管理学セミナー「東京の大地の成り立ちから自然災害を考える」聴講報告

藤下 進

毎日新聞社が事務局となり、「だいじょうぶ」キャンペーン＝みんなでつくろう、広げよう、安心・安全な街＝が全国的に展開されています。その一環として7月16日に千葉科学大学・危機管理学部の植木岳雪教授による講演会が「東京の大地の成り立ちから自然災害を考える」とのテーマで毎日ホールで開催されました。

◆結論はこうだった。

「東京の都心部は地理学上、地質学上からして安全。それ故に昔からお殿様が住んでいた。」とのこと。なるほど納得。

自然との共生と地球環境の持続的利用を目指す「環境危機管理学」を地理学、地質学からアプローチされている。

自分が今住んでいる足元の大地について考える時、現在のことだけでは「ダメ」である。過去のことを知らないと「ダメ」である。

◆危機について時間・空間スケールから整理してみる。

時間 ① 数分～数時間：身体的安全→消防、救急、医療

② 数日～数年：生活の安定→防災、リスクマネジメント、BCP

③ 数十年以上：持続的発展→ランドデザイン、ロードマップ、立地、施設計画

空間 個人・集団 < 地域 < 国家・地球

※上記に掲げたアンダーラインを記した箇所に地形研究・地質研究は貢献する。

◆東京都心部で起こり得る自然災害は次の通り。

1. 地震災害

(1) 地震動によるもの

短周期の地震動→建物、道路の倒壊、ライフラインの損傷

長周期の地震動→設備の損壊、エレベーターの閉じ込め

(落石、崩壊、天然ダム・土石流はなし)

(2) 津波はなし

(3) 火災→大きい

(4) 液状化

(5) 地盤沈下

2. 地質災害

(1) 天然ガスの爆発→地下鉄の災害

(2) 地盤沈下

(3) 火山灰(テフラ)の降下→死ぬことはない。生活がしずらくなる。

3. 気象災害

(1) 洪水、(2) 高潮、(3) 大雪、(4) 落雷、(5) 竜巻・突風

◆東京都心部の台地は次の二つに分類される。

1. 海に面した広い台地＝海が作った段丘＝海成段丘

土地の隆起＋気候変化・海面変化＋海岸浸食で出来る。

暖かい時期に出来る。海沿いに広い。

2. 川沿いの台地＝川が作った段丘＝河成段丘

土地の隆起＋気候変化・海面変化＋川の側方と下方の浸食で出来る。

いつでも出来る。川沿いに狭い。

※海が作った段丘も、川が作った段丘も土地の隆起や気候変化、海面変化、海岸浸食、川の浸食等によって作られたもので、しかも何千年、何万年もかけて海と川と大地との戦いによって出来上がった。従って、頑強なものに違いない。

◆東京都心部は、高い台地、低い台地、低地から出来ている。

(1) 高い台地は海成段丘、低い台地は河成段丘である。

(2) 低地の下には埋没谷があり、軟弱な地層に埋められている。

(3) 台地を刻む谷も軟弱な地層に埋められている。

(4) 台地や低地は、地球全体の気候・海面の変化によって形成された。

(5) このような地形・地層の分布が産業、生活、災害を規制している。

◆「現在は過去の鍵である」ライエル

→過去は現在の鍵である。

過去を調べることによって、現在が評価出来る。未来が予測できる。

速報！！ 放送大学「秋祭り」への協力参加が決定

茂木 宏

放送大学千葉学習センターの「秋祭り」実行委員会より千葉県北部支部に対して「秋祭り」(第7回)への協力参加依頼があり、当支部としてその主旨に賛同し協力をする事が決まりましたので概要をお知らせいたします。

1. 放送大学とは昭和56年に設立された通信制私立大学で千葉市に本部を置き日本全国に数多くの学習センターを持っています。幅広い年代と職業の人がテレビ、ラジオを通じて学び、累計約130万人の卒業生を持ち現在も約9万人が在学しています。今回の協力依頼があった千葉学習センターは千葉市美浜区の大学本部内にあります。
2. 今年の「秋祭り」のテーマは「つながる」で、学内と地域でつながることを目指し、その重要な分野として「防災」が取り上げられました。今回の協力依頼は北部支部の飯岡孝防災士が同放送大学の在学生であり、学内で防災士会の活動紹介をしたことがきっかけとなりました。
3. 「秋祭り」は学生代表による実行委員会主催で、学生だけでなく地域に開かれた催しとなります。テーマに沿って学生等による様々なイベントが行われますが、今回は「防災」が最重要のイベントの一つに位置付けられており、展示やデモの内容企画については当北部支部に一任されています。展示、デモの内容は現在検討中ですが下記を予定しています。
 - *地震体験車（起震車）デモ：震度6～7を体験、平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震、平成7年（1995年）兵庫県南部地震などの波形を再現
 - *非常時対応訓練：AED、心肺蘇生、担架搬送、三角巾、ロープワーク、テント他
 - *展示による防災啓蒙：家具転倒防止用具、災害備蓄品、防災用品他
4. 「秋祭り」の開催日時は10月10日（土）12時～15時半、11日（日）10時～15時の両日です。会場は同大学の千葉学習センター（千葉市美浜区）構内です。
5. 今回の参加は地域の防災意識を高める事に貢献出来るもので、防災士会の趣旨とも合致しますので北部支部として全力で取り組みたいと考えています。その実施には多くの皆様に参加いただく事が必要になりますので、どうぞご協力を宜しくお願いいたします。（詳細は別途事務局からお願いをいたします。）



編集後記

我が日本防災士会千葉県北部支部では、平成27年度事業活動計画を効率的に進めるため、「スキルアップ研修」「総務」「広報」の3つの作業担当が決められ、支部役員に担当が割り当てられ、支部活動の取材および支部会報その他の媒体を通じた支部内外への広報・情報提供は、広報担当の役割となりました。

本号は、広報担当が発行する支部会報の第一弾となります。

本号の発行は8月になりましたが、支部会報の発行時期は4月、7月、10月、1月の年4回を基本といたします。

ページ数にはこだわらないで読みやすい紙面をめざします。

最後に、本号のために記事原稿や情報をお寄せいただきました各位に感謝いたしますとともに、引続き、皆様のご協力ご指導を、よろしくお願い申し上げます。

広報担当： 藤下 進 茂木 宏 青山久子 黒田哲司